



於 179
人

翠帳紅闌萬事之禮法雖異編蓬白屋一生之歡會是同。

と朗詠。葛の袴もそりめ正しく。うび

よる小四方を捧めらべ。餘ゆふあそびで夫婦が間みすもくと。三千
年を壽るの土器。うべ妹と夫が命を縮む短刀。渡海へ。うべ
千人を殺す。うべ一刃も今うよらひびけねば。打撃くを竜王
八目を力く。うべやぶ又三郎。儀形形をめぐらかく。やぶされ竜王。渡
海ゆく。うべ仁義礼智忠信孝悌の八のり。人間一生涯の
守奉尊す。うべその一ツ。うべ缺くとへ。終よせよ立玉を祭ど。うべ
うべざる。うべとおらふ。女きよ魂を奪れ。主の要金を遣ひ失ひ
利。君家滅亡の日。ふゑうのひ。女性幼君のあん徳方。ふゑうにて
門客と左ひ。それとめより汝木が言語の間みと猜く



う。かく大自物されど。身のあたれをす。死んとぞひ定めくる。
それも女々しくぞうへなせど。渡海を携来て。親の家を踏みし。
六十餘る三郎を。虚氣よりそく傷うゆ。おうへみぐらむ。
夫婦うろとふ。又が膚を舐へん。と計收する。不孝不忠を。うそ親
ハ免そとも。皇天うぢ許一タク。これハ村落ふ老朽と。聖の教ハくも
あらねど。教ごく子よ孝行を。あらりのまへのく。汝を龜王と名づけ
く。龜の一名を玄武と稱。その形譬バ武士の甲冑也。故ニ龜乃
全牙を甲と号く。甲ハ則鎧なり。六を藏し。物ニ傷られど。天地と兵
か軍長れど。その名とせしも。やゆ。又次男を蟻王と名はケ
よ。蟻ハ毛をえく。勇むあり。食のると毛ハ。毛を食を貪り。毛
のみ類死されば。員ぐるをよ蟻矣。虫よ毛を副されば。毛ともの毛
ふ表せ。されば。兄ホ小稚ミテリ物続し。半習し。擊劍奉法ゆ人
き。教く。行の為。そ。小耳ニ挿し。忠孝の道踏迷く。借金の湖ニ
よ。また。泥龜の泥カセ親の面を汚そ。白徒。よらず。うれど。ゆ。ハ一
代領地ハ永代。み水江ト法勝寺ニ属られ。主。俊寛。僧都ハフニ
爲。主君とす。もあらねど。汝ホ兄オを進セ。子の如く
う。それも既よか。汝ホハ恩顧の力のう。倘。翁。ぞうじゆ。う
思を。あら。楊貴妃。小町。恋。と。云。と。も。き。と。や。あ。う。耻。を。う
べ。自叙せよ。刃の中の腐へ。と。も。縫除ざれ。後。愈。ひ。で。以。替。と
え。せん。と。刀突立。居丈高く。老の怒の烈。と。渡海。い。悲。く。
亀王。ぬ。科。は。す。縁故。の。よ。け。う。その。ふん。怒。を。承。つ。よ。ひ

とくとも笑ひにゆく。只前世の惡縁と名ひつゝも是す。おん噴
を末期の水ようらも流へてうろよ。夫婦のうらみを報へとす。
投すく泣より。龜王の足を入る。額の汗を膝ようけと。又よ歸く
まうと。鹿を逐ふ。掠夫山をえど。と恋暮の癡情よ忠孝を。りひ
忘まへ。過を陥ふる恨ひ。又を忻る。とあむ。毎さん。女子と共に。憤死して。
あれ後。あで人ようちられ。親同胞よ面目を失ひ。そんハ龜王が志。ゆ
りねど。いく度海。泣鳴れ。已。とを。恐ど。おそやう。外。あぐ。最期の
暇を。まうせんと。罪を。倍ば。ひとく。うかがひ。すくすく。りる。日没の
大渡。あく。才蟻王。環會す。彼。ひく。罵耻。と。案の前。親
子の在。ぬ。も。問。ど。されど。悪。坐。と。る。み。彼。が。執刑。へ。まう。と。そ。
ありぬ。せん。捨。など。せ。ま。捨。と。ま。て。狼狽。り。と。子。き。れ。と。そ。犯。ま。な
く。

と。自殺。を。さ。め。と。老の手。づく。又。階。と。ゆ。の。そ。の。慈。の。手。を。
負ふ。重。と。罪。科。を。り。ふ。せん。す。度。海。覺。研究。く。來。じ。よ。今。ま。う。數
く。う。う。と。尻。目。小。か。げ。く。し。励。し。押。肌。脱。が。經。惟。子。六。字。の。名。号。墨。黑
ふ。口。ふ。も。唱。る。波。海。が。携。る。袂。と。う。ち。排。ひ。小。四。方。あ。そ。か。戴。る。經。刀
も。う。ア。と。拔。放。く。が。又。ふ。あ。く。竹。龜。あり。と。不。審。と。龜。王。の。波。海。と
目。と。見。の。へ。し。呆。る。く。又。も。冷。咲。ひ。龜。王。それ。を。何。う。え。一。夫。劍。ち。人
を。斬。その。刃。を。傷。る。刃。の。よ。あ。う。ど。君子。の。笠。を。帶。く。才。の。衛。と。英。雄
と。を。た。く。國。を。治。し。又。ふ。似。く。竹。龜。の。弑。逆。の。刑。具。し。る。竹。龜。よ。これ
等。一。科。重。と。腹。切。る。真。斬。を。許。され。ぞ。扇。を。た。く。これ。ふ。抱。ひ。三。郎
が。今。竹。刀。を。授。へ。扇。腰。の。う。う。う。汝。が。正。を。自。物。の。腹。切。る。と。心。を
よ。く。も。あ。う。ど。又。が。教。く。る。ま。き。え。よ。マ。セ。よ。め。と。り。ひ。も。う。ど。刀。胸。と。

拔つ。と腰へ突きましバ。そりとぞうと龜王の竹刀捨て渡海と。
左右ころ携田物を手取ひまくん。そも行方の自殺と決ふべと
ふ間夫婦を。そそくさんと息を吻。行ゆる意もるぬ焼野の
稚子夜の鶴北を暴ひ難を忍び木石ふれかず。餘命いく程も
ゆくぬ三郎が。皴肚切く見よ代モ當終罪の贖ふまし。あはせ
夫婦力うともふ。初君女性のあん在れを索めり。失ひづる金綱連
いきに勘當の勧解をせよ。罵励セーチコ子が可憐。血氣
のよきまくさくぬ。こゝ時みへ一トよびの恨みあるのと。そそくも許
をふる许されぬ。義理うそ人の祥あれ。嫁ゆくうす笑ひしそと
ひ声ひとよかくやくおも集く虫の声庭の木をとめる月よ。
諸行そ常の教をひそ。哀りやまと初更鐘生平より耳も改
モ。龜王の杖ひのくぬ。臉み絞る血の波。嗚呼慄み死後モ又の非命
もとのゑと。やぶら身の牛裂み。裂きとも罪科を贖ふよる。是
らざべ。命み代モなれど。慈悲ひと深き死とり。過世ゆる業
因だ。と胸うち敲ふく悔歎く理すれば渡海も。かうと歎み申
て。かねでーとある。三國あくともやも。ようなんのとほの一言。
未朝の暇あくさんとく。辯逆まふに完姫の从抱をもる。左意
ゑ。月夜烏の夫婦がうを。啼くのみゆひけり。と啼ひうほ
被方此方よ。ゆび活きが三郎の。聞きまく眼を潤と瞬く。す益のほ
悔時こそ移き。こゝ一命へ俊寛僧都の恩よ恭へる義士の意地。清
の領主の民よ。とちひ定めく捨る身を。子みそへ代る森。よえ
遺言を化みく。夫婦非命よ空くよ。夫の親よ大死し。

子のうゑ
あら案を
笠守
牛の雨

蓑笠
自題

お王

多のまよ



忠より缺孝より虧んをも斬りを承も傷ぬを作刀を紀念
とわがりと直ある竹のてろすと今こそ許と好文の縁今を
結ぶ三九敵も父、童泉へ水孟別の櫛の歯を挽て宣六士の迎ひ道
つまねりとも苦痛をよどむる其れ放すをよと焦燥と右半の
體へらめくも力夫を又抜手一握ふ拳の空めを喰らひて
例と屍に血ふ盃と同もあくわれぬ方野ろす丈婦一度よ泣叫
び空巣よ著えゆりくよくに泣ど田舎ハ隣もい遠く游
人けらむ夏の夜の呻がぬあに虫の音小月魂尼を更闇をき
れも西へと鷺もるる又が亡巣よすめ詔身里人木小告志
つ形の下ぐそ送葬とし官吏七くの追善薦伊豆叮咛亭小舟を
波小龜王ハ渡海を伴ひ故郷をまかれて彼此を御宿りと或ひに

あくまでも身の内へ
ハ丈人孺君の仕方を考へ
又あるそぞい夫の名る金と潤達
せんとく平肺肝と摧さも活業
ばよかに退糧人のその日をま
従官とせきを夥の金をつゝのふ
驚きよまぶらむれんご父の遺言を
空くせもろく丈婦送小志を励
方より旅小日をあくら御秋
もの記すもなげく治承元年ハ暮小了

年暮小月
抱芳心贈雙言
冤枉雪之

明きを治承二年の春も夏の
季節御産の御祈り
抑高倉院の中宮入道相國清の女兒と津徳子安徳
天皇の國母なる小よりく多院号を建不門院とす
るりゆ懷妊のゆく物の怪のあらうかとすもあれば平相
國入道云何がる若根を植ひ鬼界嶋の流人丹波少將

成経。平判官康頼を赦免せしと急便帰洛あり。とく。今年七月三つの白小印教書をうけし丹左衛門尉基安よ。難波三郎経房を相副く。彼鳴へ遣一々。さんばむす。罪あり。もとト嶋へ流されまわ。俊寛も。早相國へさふゆ。昔時の恨を心ひ忘とぞ。ひよく腹ゆく。肇俊寛を召還す。かく成経康頼。九月下旬よ鳴を出。肥前國加瀬せ社へ。成経の舅が盛卿の所領す。サ將判官。彼地よ逗留。その夜を暮。治承三年春二月よ。悪く。帰洛。と。風声隠。し。狂よ。執事の夫人案の前へ。俊寛はむと。と。赦ふ漏え。うと。ら。と。鶴の前。徳壽丸。タ。うとも。け。と。暮。と。ねじ。み。貪慾邪慳の案山四郎。俊寛。舊のどく

す。發迹あり。過分の恩賞あり。と。又。才の為ふられを教び。
ゆう。信す。ふ。曾待。ゆく。やく。鬼鬼鳴の流人。ホ。翌去へ入浴をと。唆え
し。案の前。ひの。喜。よ。その夜。ひの。寝。よ。と。ぞ。蛾王安良
子。宣す。執行。ひの。年。未。憂。き。鳴。不。持。と。す。や。及京。一。日。へ。よ。
居。つ。紛。ん。ハ。ひ。ー。と。子。ひ。も。ら。も。そ。り。ば。宇。治。ま。で。も。俱。と。く。の。け
か。と。仰。と。べ。蛾王。參。と。仰理。よ。學。と。ゆ。某。孺。君。の。あ。ん。供。と。く。翌。ち
ほ。と。免。と。鳥。羽。ち。で。も。ま。う。ひ。ある。ば。う。ろ。ひ。う。が。女性。の。出。迎。へ
あ。ん。ち。時。次。の。役。と。便。す。見。物。の。老。弱。是。首。被。首。と。群。集。せ。ん。候。
ひ。う。ぐ。く。と。あ。と。紛。ひ。ん。す。と。あ。う。と。と。案。の。前。微。笑。く。執。行。の
嶋。小。在。を。宿。ハ。世。を。も。憚。り。つ。既。よ。免。され。く。ゆ。り。き。バ。略。次。の。狼
藉。の。夕。べ。う。り。ど。汝。か。り。ふ。ふ。慮。よ。過。と。う。ぬ。由。迎。ま。る。そ。れ。る。と。よ。だ。
ゆ。く。ゆ。け。ー。と。宣。ひ。黙。止。ぐ。く。舅。姑。と。縁。由。を。す。く。蛾。王。夫。婦。
清。且。お。と。ふ。三。人の。主。を。扶。掖。く。あ。日。ハ。東。寺。の。四。塲。ユ。一。宿。し。次。且。宇
治。の。母。お。ま。い。め。と。く。サ。引。入。見。す。る。芝。生。の。松。が。枝。ユ。齋。く。大。破。
幕。を。替。い。著。主。徑。頃。を。長。く。今。か。と。往。は。ゆ。午。の。貝。吹。比。
及。ユ。轎。二。挺。寢。よ。入。む。浩。の。親。族。出。の。し。ぬ。と。每。く。く。人。駆。後。方。
先。方。ユ。あ。と。ぐ。く。と。向。よ。る。人。の。丈。も。高。く。モ。と。り。ひ。と。頭。ー。ん。ば。い。く。
丹。彼。女。特。と。平。判。官。の。及。浩。ー。と。す。と。斧。よ。あ。く。バ。法。榜。寺。の。後。
れ。へ。ほ。れ。ま。と。向。よ。る。人。の。丈。も。高。く。モ。と。り。ひ。と。頭。ー。ん。ば。い。く。
ふ。遣。す。と。と。且。と。と。又。一。挺。の。轎。を。先。ふ。昇。し。六。波。羅。の。侍。丹。左。ほ。つ。
尉。基。安。馬。上。の。く。や。來。ま。す。向。す。も。そ。く。そ。う。め。と。案。の。前。被。
子。ハ。安。良。子。ス。幕。う。を。揚。す。く。ね。多。ふ。と。間。近。く。そ。う。ぬ。當。下。蝶。

王へ轎の左キニ立す。若黨が袖を引く。乞ハ俊寛僧都の夫人、二人の印子もをねぐ。出迎へる。僧都ヨリ才をもじり。と礼儀を正しく。述々バあく轎を幕の内とす。おもひつゝ。と。をうふ。親子三人きりあす。忙しく轎の戸を川内上バ俊寛うそべ。難波三郎経房裡より案の前の手をさす。やまし立物。冷笑ひ獸を捕え。陷穿をりつく。魚を炙る。蚯蚓をりて。それりぬる年より。平相國の仰と稟密。又案の前の往方を走らふ。経房の在処をあく。と。さて此度成。経康頼帰洛の叙。俊寛もりゆく。ふ。戻。うと風声。走り出せどあく。と。と。主経房。驚き。蛭王矢度。又経房を拂ひ退て夫人を後方よき。油断せむ。安良子ハ鶴の前と。徳壽丸ふりまふ。裏胸を引。照る。難波ハ左右す。打めやらむ。あく。の。と。立。浩智。丹左坊。つ尉基安ハ馬をす。けく。内とをう立。准儀の床儿をす。と。て。役者ホふの。す。吉備兩人ハ且く。おぬふ所要の。汝ホハあく。彼れき。事等院ふゆ。割籠を開。放す。休足せよ。そく。とい。そか。と。う。ね。が。ま。う。ケ。タ。ウ。リ。と。底。と。基安が奴隸ハ馬を樹の下。ふ繁との。抹を。拂ひ。石き。お。き。ら。の。り。り。り。と。基安が奴隸ハ馬を樹の下。ふ繁との。抹を。拂ひ。経房が奴隸。おハ轎を擡起。打つと。うち。と。平等院へ去ぬ。基安を。を。目送り。と。案の前。主役ふ。射ひ。俊寛帰洛と。まえ。程よ。そく。あ。ま。う。び。ち。ひ。る。あれど。俊寛僧都ハ。年。來。相國の僧を。お。と。お。お。を。り。と。を。う。嶋。お。送。れ。う。と。説示せ。が。親子主役。ま。の。と。そ。も。り。う。ふ。と。疑。ひ。感。ひ。う。と。一度。お。注。況。ひ。難。波。三。郎。これ。を。え。と。叫。と。う。笑。ひ。さ。の。と。吹。て。ひ。の。母。偽。ふ。とも。名。べ。れ。が。と。ん。洋。ふ。強。あ。せ。ん。

當初平相國案の前を懸想へありたり。ふ朱祀られを進む。却俊寛、妻、子の元憤絶とぞ。経房仰とうべり。去年の秋成親卿を配所に殺し。その比俊寛も殺さるべり。道遙されば且くられを放へ。去年の秋成経康頼赦免されん。使を命ぜると。これ丹左衛とすも。鬼界鳴よ五日とて。この便宣をかく。俊寛を千尋の水底へ推投め。罔王宮へ落す。そもそも再會焉。俊寛を慕へ。志を改め。平相國へまくす。鶴の前へまくす。破児徳壽が余を助けてうんと。彼夷朝が愛妻。常盤が玄操ふ做ひ。松よ常盤に見え。久後愛とく榮さん。悉をうそく子を殺しと。まくことよを僥倖もひ。まく。ころまく回巻せよ。といひせゆめ。ど蛭玉へ主君の仇人脱す。と。肆め立ちゆき。基安急ふ。抑隔尾籠の壯校狼狽と。怒を強め。基安が。ひひもももりとめし。とふとれとて蛭玉へ。齒を切らそつひわす。鳴ふと。又ひじきれ。と。笑く同胞の夢の中ふ。夏月は。牙を震し。泣んと。もと。声生を。脊柱は。安良子も。安ゆぬ牙の物をひを。慰めぬ。一袖の秀。共ふ。消ぬ。ど死を。おせ。案の前へす。やふ。おひ絶年月を拭ひ。経房よ對ひ。相國の豊簡す。ど。ゆり。と。も。や。北年近。昔。あうね。かの。虫工。一旦か。一。け。と。を。乞非。果。と。く。う。一。子。ど。も。ら。か。と。不。便。三十。ふ。あ。す。野。中。の。松。の。花。も。実。ゆ。と。を。嬌。ひ。ゆ。か。仰。あ。も。情。う。ゆ。と。被。一。ゆ。ふ。う。ら。ゆ。と。を。経。房。坐。そ。床。几。を。そ。う。う。三。十。も。う。き。と。お。と。も。齋。う。て。も。平。魚。義。女。へ。是。女。う。角。も。づ。く。と。延。う。と。も。齋。う。て。も。平。魚。義。女。へ。是。女。う。角。も。づ。く。と。延。う。

程房を刺すと
節婦自刃を

王



領諾あくべ相國もさすそ筋びりありづんちやあうゆとひり
けく牛あらむる波斯よすあくと窓の前ハ経房が力を内りと後ろ
膳きと刺身倒そこうま、黄りと亦胸を刺んとする
小経房も肩へわらに弱められを窓の辟月を杖足と犯と過
忽地は反そらを帳王つゝみをあひ難彼が頭髪をひき廻仰
まぬ不捨挂バ女あらじも念力の岩も微き怨の力尖三刀四力刺厚
難彼ハ般く息絶た鮮血溢る屍のよ窓の前ハ死うち
名れなる刃を吃ナ項へつりりき仗りよあると痛まし
壽安良子立ちふをうつ抱き起立窓の前ハ深瘞をれど矣
所を齧て又縛折まき二人の子どもをえりきよめのひよ
もあづれを漬る血ト帰る後不思議もあし職王も救ふ

るひすゞままでよ。かむくらの勅あそ。丹左侍つ尉基安へ。傍軍の討
をも助けど。まゆ床ル又尻をうけ。手を又たつ。この景迹とて嘆息
し。案の筋よ對ひくりゆや。夫人の養父成親卿を。討する難波を刺
あへ。武士も及をぬ奇特の舉動。飴ゆそ時ゆそ平相國の。おん威勢
をわくとせられ。俊寛僧都の志。おらば。み經房。その人と
さり。足經達よ等。奸邪ゆく糾と助るの癖者。こまよふ。うそて。平
相國をもくをあり。寔よ朱馳卿を配所。毅。刻俊寛僧都の
帰洛を阻。此度鳴。まく夫りんと計。彼も。これ理を竭してこれ
を禁め。僧都の恙。まくて。まゆ配。よめ。このより。あもふ。ちよ
ゆく。おひすゞ。いふよくて。禁止せ。が。可惜烈女を毅もそ奉
意。まよ。経房。まよ。惡棍。されば。て。まく僧都の役。よ。毅せんとおへ

をりく。彼れが後者あとごを遠離とおる。これ侍の情じやう。主脣しゆりんは惡あくをすまへ
とく。傭車ようしゃをとん殺ころさむして。ね基安きあんがす忠ちゆう。と鏡示かがみせん。
主役しゆえきとく。とうち魚うお。感淚かんたる。さらりとがくら。案の前まへ息の下した。
基安きあんを伏ふ洋よ。アガ良人よしと大赦だいぜつ。エリヒえりとも。悉すべく。嶋しまふゆ。と
告おほめのまう。一言いつごん。吾智磯ごちいその引導いんどう。すく成仏じゆぶつある。やよ
徳壽母とくじゆめが難波なんばを殺ころさむ。追捕ついぼうもひく急きゆく。あん翁おんのう千賀ちか
ハナ。うりひく。大人おとな。すくなう。と。蛾王おとわおうをねく鬼鬼ききとすんへ。
度わたく。塗ぬを効と。船ふねと女子じよのうるえが。ト。や落おちふ残のこる。も。
六波羅ろくぱら。榜索ぼうそく。殺ころさむと。安良子やすらこ。危あやふ勦のぞす。よ。
船の往来ようりようも。うりた荒殘あらざん。三年さんねんが間ま。とく。二人ふたりが中なかに一人ひとり。
遺のこえままを足あしく。やうく墓はか。うりあへり。顛ひん身みの息いきの内うち。今いま
一下ひとさびのゆく。手てと経きつてが爲ため。過すぎ七の追薦ついせん。四十九箇くわん
日果ひご。塊魄屋揃塊魄屋揃を離はなと。せうへりと。もつぶが魂たまハ浮うきよ。也
やうへりと。うつむ瀕せきぞうと荒海あらうみ。海うみと鬼きの名な。身み。鬼鬼きき。
鳴なるふのうと。あれ。え世よの養うくと亡母むかづきを。墓はかへそりとも長旅ながたび。疲勞ひろう
なうとも名なもあく。荒殘あらざん。迷まよひく。虛うつくと。可惜光陰こういんを。うつさせ。そ
りふびた。すへる。これの。ひき。基安きあんど。こか首くびを刎きり。相國あいこく。進すすむ
くよ。ひりひ果ごく。双ふたを拔ぬく。真赤まっせきの鮮血せんけつ。浸しみ。黒髪くろかみ。白しら。膚はだ。毛け
青あお。うそ。黄き。泉いずみ。去はなく。年としの夏なつ。養うく。生う別べつ。そ
う。春はる。母め。前まへ。死別しへつ。そ。業因えいいん。昔むか。例稀れひ。ううごー。つま。一言いつごん
徳壽とくじゆ。鶴つるの前まへ。も。空うつびくと。嘔く。と。左さ右う。空うつ體たいを搖うわらわ



胞足才を
基安首級を
獲て居る

效く

首級を

獲て居る

動く。口死ば安良子も友音みぞ啼群鳥。求食ゆひ淺は
く。榮枯得喪画ゆす。愧安國の夢の迹蟻王が牙ぞせう。再
左歩う声を励く。塗す悲難ふ時を移く。難波が役者なり
來うらば蟻王一人り防んや。人あらず是する間よ鶴の前と徳壽丸
を扶被る。さうの外を立退く。これハ又案の前の首を引摺て諸
ふ死す。難波が聲き一碌故と審ふゆえゆ。首級実檢どふ果矣。
屍ハ葬ぬまうさん。あづゆ躊躇みうる。とりひ渝つ刀を拔く。打
落と母の首ふ。携ひ去く遙と。絆同胞を引出る。蟻王も安良子も
是を一世の別とぞ。かく喧ぐるを。見うて、もせども基安。
双を手て鞘又納め。桂の袖ふ押包ひ。その死顔と泣血と、肖る。親
子の離苦哀別。世を宇治川の水うらで逝く。ゆく寂寞土の旅と。

鬼へ渡る憂旅の首途をあがくりむ。基安みづち馬と牽
う。首級を鞍ふ結ひ著く。ゆりとうち跨おもあれ。遙よ生
徒者ふれよ。と丹左歩うが胸まれば蟻王の安良子りそ
とも基安よ言語へきく。告別。泣泥ミテ同胞の手を引く
からく。河原ふそくに涙満まく。

泉屋 燐水 兵衛 達 泉屋
衛 衛 衛 衛 衛

